

令和2年度 学校評価のまとめ

■評価シートについて

今年度の評価シートは、授業に関する項目2点について変更を行った。その他の評価内容は変更せずに実施した。

■ 令和元年度後期との比較

評価点：十分できている=4、おおむねできている=3、あまりできていない=2、できていない=1

	R1	R2	
I 理念・経営方針・重点方針	後期	後期	増減
学校の理念、及び基本方針の理解	3.2	3.2	0.0
所属部・年次の経営目標の理解	3.2	3.3	+0.1
勤務時間の適正化への理解	2.9	3.1	+0.2
教員としての資質向上	3.2	3.1	-0.1
危機管理への理解	3.1	3.2	+0.1
関係機関との連携	3.3	3.5	+0.2
II 魅力ある学校・特色ある学校への取組	後期	後期	増減
授業規律の確保	3.2	3.3	+0.1
授業力の向上	2.9	3.2	+0.3
特別支援教育への理解	2.9	3.1	+0.2
「共生社会と人間」の運営	2.6	2.8	+0.2
「交流及び共同学習」の運営	2.8	2.8	0.0
両校の取り組みの発信	2.7	2.9	+0.2
III 自尊感情の醸成	後期	後期	増減
学習意欲の喚起	3.3	3.3	0.0
部活動の充実	3.0	3.1	+0.1
カウンセリングマインドの視点	3.4	3.6	+0.2
誇りを持たせる取組	3.3	3.4	+0.1
生徒会活動への理解と支援	2.9	3.0	+0.1
地域貢献・ボランティア活動への理解と支援	2.8	2.9	+0.1

[自己評価]

昨年度と比較し、全体的に約8割の項目で評価点が0.1ポイント以上あがりました。その中で、主だったものについて取り上げます。

- ・「授業規律の確保」と「授業力の向上」については行動指標の項目の変更を行いました。「授業規律の確保」では評価点が3.3ポイントでした。授業に集中することで学力向上につながることや、2年後に始まる「BYOD」の導入に向けて、スマートフォンやタブレットを使用する上でのルールを身に着けさせることを目的として、授業中のスマートフォン使用の指導に重点を置きました。授業中にスマートフォンを触るものは全体的に減ったものの、一部の生徒がスマートフォンを触って授業に集中していない様子もまだうかがえます。授業担当者から粘り強く声掛けの指導をするとともに生徒自らがスマートフォン使用をコントロールができるようになり、学力向上につながるよう努めていきます。
- ・「授業力の向上」については、「生徒の理解度に合わせた授業を行っている」で3.2ポイントでした。昨年と一律に比較できませんが、「授業力の向上」では0.3ポイントあがりました。これまで多くの先生が大型モニターを活用してパワーポイントや動画で授業を行ってきました。その経験を活かして今年度より「学びのイノベーション事業」で各教室に導入された電子黒板を活用してスライドに直接文字を書き込んで解説するなど、一部の教員が新しい機能を使用した授業を行っています。また、板書とプリントを中心に丁寧な授業を行う教員や、コロナ禍でグループワークができない中、KJ法を使った授業で生徒たちの意見を出して分析させる工夫を行った教員も見られました。発展的な授業では各教員が生徒の理解度や進路目標に合わせて丁寧に指導をしています。今後もお互いの授業見学や研修の機会を更に設けて授業力の向上につながるよう努めていきます。
- ・「特別支援教育への理解」「共生社会と人間の運営」は、それぞれ昨年度より0.2ポイントあがり前者が3.1ポイント、後者が2.8ポイントでした。「特別支援教育への理解」では「学校適応調査」の研修などをおして困り感を持つ生徒へのかかわり方について関心が高まり、教員間で問題を共有した結果だと考えられます。また、「共生社会と人間の運営」では、本校の特色であるノーマライゼーションの授業を1年だけで終わらせるのではなく、継続性を持たせるため2年次において特別支援学校の3年生と合同ノーマライゼーションを行いました。さらに、共同スポーツや2年次のLHRでは「パラスポーツ」に取り組んだ結果、教員間のノーマライゼーションに対する意識が広まってきていると判断します。しかし、全体的に見ると授業担当者や一部の年次が中心で他の教員の意識はまだまだ低いことが今後の課題だといえます。来年度以降は各年次と特別支援との交流を更に広めることができるよう検討します。

- ・「交流及び共同学習」の運営では、昨年度と同じ2.8ポイントでした。高等学校と特別支援学校の生徒が「共同の学び」をとおしてノーマライゼーションの理念を培う本校の要の一つであるにもかかわらず、2.8ポイントは教員の意識の薄さが表れていると考えられます。担当者は会議をとおして共同の学びへの意識が高く、生徒の情報を共有できているが、担当者以外はそのような情報に触れる機会が少ない結果だといえます。その中でも、「地域社会への支援」「対人援助技術」の授業の様子をミニ研修という形で情報共有したり、高校生がアルバイト体験を特別支援学校の生徒に話す機会を設ける取組も行いましたが、ポイントがあがっていないことからうまく情報共有まで至らなかったと考えます。来年度は特別支援学校で高校の教員が授業を行うチャレンジタイムを計画しています。今後は、このような新しい取組や「交流及び共同学習」の取組など、担当者以外でも意識が高まるよう丁寧に情報共有できるよう努めていきます。
- ・「カウンセリングマインドの視点」では昨年度より0.2ポイントあがり3.6ポイントでした。教員間で本校の生徒指導について共通理解し、同一歩調で指導にあたるとともに、生徒・保護者の話を丁寧に聞くなどカウンセリングマインドの視点を意識している教員が多いと判断します。年度当初の研修やコロナでの臨時休校明けで生徒の様子を注意深く観察することで先生方の意識も高まったのではないかと考えます。また、7月末にはカウンセラーによる「生徒たちへの理解と支援」の講演会も開催しました。さらに、心のサポートのミニ研修も取り組んでいます。今後も継続したカウンセリングマインドの視点を大切にするとともに、状況に応じて毅然とした態度をとりながら生徒指導ができるよう努めていきます。

[学校関係者評価]

- ・さまざまな環境を抱える生徒も在籍する貴校においては、他校より「思考・判断・表現」「主体的に学習に取り組む態度」を評価する方法を積極的に取り入れていただくことを期待する。このことが、生徒の「確かな学力」の向上や、自己肯定感にもつながると思われる。
- ・貴校の特色である特別支援学校との連携の自己評価が、昨年度より上昇したことは、評価に値する。一方で、相対的にはまだ自己評価が低く、来年度から実施されるチャレンジタイムなどをきっかけとして、より連携が進むことを期待する。
- ・「自尊感情の醸成」について、生徒が主体的に取り組む共同的な活動を通して、他者から認められ、他者の役に立っていると実感できる機会（ボランティアやインターンシップに加えて、日常の授業における協同学習や係活動、部活動等）を一層充実させることがこれからの課題であると思われる。
- ・東日本大震災は、子供たちが学校に滞在している中で起こった。本校は武庫川に近いこともあり、災害の可能性もあることから、今後も、防災ジュニアリーダーの育成が重要である。
- ・全体的に学校改善に取り組んでいる姿勢が感じられる。障害者スポーツや合同ノーマライゼーションを積極的に行うなど先進的な取組で評価に値する。これらの取組を視覚化して担当者以外の教員や生徒にも情報共有してほしい。
- ・他の夜間定時制高校を視察し、実態を見ることで阪神昆陽に取り入れる手法を学ぼうとする姿

勢は今後も継続すべきである。また、阪神昆陽を多く受検する中学校の授業見学を行い、今後どのように授業改善すればより良い学びにつながるかを研究することは評価に値する。

- ・自己評価だけではなく他者（生徒・保護者）評価を加えることで、学校の課題や成果がさらに深まると考えられるので他者評価は必要である。
- ・教育の根本として「何のために学ぶのか」は、自分自身が幸福をつかむためのものである。知識ばかりではなく、「人の思い」「人道」を大切にして他者と豊かな触れ合いを通して生徒が成長できる学校になることを期待する。